

沈黙の空

菊村 到
沈黙の空



沈黙の空



昭和三十九年七月三十日 印刷
昭和三十九年八月十日 発行

定価 三七〇円

著者 菊村 到

発行者 豊島 清史

印刷者 山森 忠一

発行所

株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(二五)〇二三八番
振替東京 五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目 次

夜をただよう	3
その芽を摘むな	49
太陽は沈まない	93
硝子の野獣	133
心 音、	165
沈黙の空	195
あとがき	255

夜をただよう

香椎^{かしい}宗吉の送別会は、午後六時から有楽町のレストランのホールで、ひらかれることになっていた。香椎宗吉は、大学を出るとすぐ、新聞社にはいり、そのまま、五十五歳のきょうまで、ずっとあちこちの新聞社を転々としながら、浮草稼業のような、いわゆるエンピツぐらしをつづけてきた。その香椎が、いよいよ停年で社をしりぞくことになったのだが、停年までつとめあげた人間にしては、かれの最終ポストは、ひくすぎた。かれにあたえられていたのは、社会部の都内版主任という位置であった。

かれがいまの昭和新聞にはいったのは、太平洋戦争中のことであり、昭和新聞における社歴は、そうふるいものではなかったとはいえ、根ツからの新聞人である香椎宗吉が、たかだか主任クラスで行きどまりになったまま、新聞記者生活からしりぞいて行かなければならない、というのは、かれを知るものにとつてはもちろん、そうでないものにとつても、わびしいかぎりであった。

新聞記者には、昔からいまにいたるまで、世俗的な立身出世や栄達にたいして背を向けたがるような氣質が、ながれている。新聞記者として純粹に生きようとおもえば、どうしてもそういう姿勢をとらざるをえないようなところがある。

だから、そういう視点に立つてみれば、ポストがひくかろうが、給料がやすかろうが、とにかく停年まで、ずっと記者生活をつらぬくことができたのは、むしろ慶賀すべきことなのかもしれないな

った。だが、じっさいには、香椎宗吉に向つて、よろこびのことばをかけるものなど、ひとりもいなかった。

香椎が、停年でやめるのに、自分は、まだそのまま、つとめをつづけている、ということに、なんとなく、うしろめたさを感じている、と言つたふうなのである。

山木悦二が会場の、そのレストランに着いたとき、すでに八時をまわつていた。あるいは、もう、会はおわっているかもしれない、と、山木は、階段をのぼりながら考えた。

かれの心のどこかに、会がおわっていることを、ねがう氣持が、うごいているようだった。

氣のどくで、香椎の顔を、まともにみられないかもしれない、という氣持がしていた。しかし、そうかといつて、その会に全然、顔を出さないというのも、冷淡すぎるようだった。顔を出したのだが、もう会がおわっていた、というのであれば、自分じしんにたいして、言いわけが成りたつしたぶんゆううつそうにかげつていであらう香椎の顔も見ずにすむわけである。

だが、ホールの入口まで来たとき、内部のざわめきが、山木のからだを、ふわっと、おしつづんできた。まだ、おわつてはいない、とおもつた。

ちやうど、司会の筆頭デスクの秋山が、

「では、さいごに、香椎君から、あたらしい門出にさいして、なにか一言、うかがいたいとおもいます」

と言つたところであつた。

拍手が、おこつた。けれども、その拍手の音は、まばらであつた。参会者たちも、その時分には、もう主賓の香椎の存在など、どうでもよくて、それぞれ、勝手な話題に熱中しはじめていた。

香椎が、立ちあがった。角度のせいか、やせている香椎のからだは、じつさいよりもさらにやせて、たよりなげに山木の眼にはうつった。

型どおりの謝辞のあとで、香椎は、こんなことを言いはじめた。

「三十年前、ぼくは、はじめて新聞記者というものになったとき、自分もいつかは停年を迎えるのだ、ということなど、考えもしなかった。五十五という年齢は、自分には永久に無関係のもののような気がしていた。自分はいつも若さにあふれ、そしていつも陽のあたる場所で生きて行けるような気がしていた。けれども、いまになってみると、ぼくにも、そういう時代があったのだということが、なにか信じられないような気がしてくる。ほんとうに、あッ、というまに、年をとってしまった、とおもう。三十年間にはいろんなことがあったけれども、けっきょく、いまになってみれば、なにもおこらなかったのと同じではないか、という気持ちになってくる。秋山君は、あたらしい門出とおっしゃったが、ぼくにはそういう感じはない。ぼくのいまの心境は、もう人生に、なにも期待しないですむぞ、という、一種の安定感のようなものでさええられている。しかし、だからといって、いまのぼくは、べつにそれほど暗い気持ちになっているわけではない。絶望的でもないけれど、希望に胸がはずむこともないと言った状況だ。ぼくは、もうもちろん若いとは言えないが、それほど年をとっているわけではない。まだ、しなければならぬこともたくさんあるような気がする。いま、ぼくが考えていることは、これからは純粹に自分じしんのためだけに、生きようということだ。他人のためになにかをする、というような考えは、できるだけ、排除して行きたいとおもう。停年までつとめあげた人間には、その程度のわがままは、ゆるされてもいいだろう。と言っても、ぼくは、なにも好き勝手なことをやろう、というわけではない。勝手なことをするには、あらゆる意味

で、ぼくには、力が足りない。ぼくが、いま意願しているのは、日常生活の平和といったふうなものを、だからもおびやかされずに、着実にまもって行きたい、ということだ。そういうささやかなねがいがあるだけだ」

香椎のスピーチが、おわったとき、やはり拍手は、まばらであった。参会者の大半は、あきらかに、香椎の話には、気をくばっていなかったようである。

その香椎のスピーチをしめくくりとして、会は閉じられた。

参会者たちは、そろそろ席を立ちはじめた。まだ、残って話しこんでいるグループもあった。

香椎は、メイン・テーブルのほうで社会部長やデスクの連中と、立ちばなしをしていた。山木は、そんな香椎をぼんやりながめていた。そして、自分にもいつか、今夜の香椎のような立場が、やってくるのだろうか、とおもった。

けれども、五十五歳の自分というイメージには、実感が、ともなわなかった。五十五歳という年齢にたどりつくまでには、もっといろいろなことを経験しなければならないだろう、とおもった。そういう経験の重みを、手のひらにのせて、はかつてみようとしても、それはすつと逃げて行ってしまう。

山木は、眼の前のビールの泡を見つめながら、人生の意味といったふうなものについて考えをめぐらしてみた。人生について考えるとき、山木は、いつもきまって、ある疲労に見舞われる。この疲労感なしには、山木は、人生について考えることができないようであった。そしてその疲労感、もしくは、虚無感は、ほとんど人生的な陰翳を帯びて、かれの全身をやさしくつつんでくるのだ。そこには、たしかに、あるやさしさ、といったふうなものが感じられた。それで、その状態は、山

木にとって、けっして居心地のわるいものとは言えなかった。思考に先行するこの情緒にあやされて、山木のなにかを考えようとする力は、たちまち、ふやけてしまうのだ。かれは、もはや考えようとするをやめて、このやわらかな倦怠をとまなう、やさしくあまい情感の底に、自分を沈みこませる。

「山木君」

ふいに声をかけられて、かれは、現実にはひきもどされる。そのかれの眼に、香椎の顔がうつってくる。一瞬、香椎が、そんなふうに自分と呼んだことが、信じがたいような気分、山木は落ちこむ。けれども、現実には、香椎はかれの前に立っているのだ。

「きみは、新栄レーヨンの寺田という男を知っているだろう」

と、香椎は言った。

「寺田？ 寺田伸久という男でしょう」

「そうだ」

「それなら、知っています。大学の演劇研究会でいっしょでした。かれのほうが、一年先輩ですが」

山木は、いったいなんのために、香椎が、寺田のことなど言いだしたのだろう、とおもった。

「これから、銀座のボトルというバアで、寺田君に会うんだ。きみも、いっしょに行かないか」

「はあ」

山木は、ほとんど反射的に、立ちあがっていた。ふたりは、ゆっくり、階段をおりて、夜のまちへ出た。

香椎はこんなふうなことをしゃべった。

「じつは、ぼくはこんど社をやめて、寺田君と同じ新栄レーヨンで、はたらくことになったんだ。あの会社の重役に、ちょっと知っているのがいてね、ぼくの骨をひろってくれることになった。あそこでは社員を対象にした社内雑誌を、月刊で出している。いままで女の子が寺田君といっしょにやっていたんだが、その子がお嫁に行くんで、やめることになった。そのあとがまにぼくが、囑託のかたちで割りこんだんだ。女の子が嫁にいつて、停年の新聞記者が救われたというわけだ。なさない話だけれど、しょうがない」

夜の銀座を、香椎とならんであるきながら、山木は、ふと、自分がいま日常生活のコースをふみはずして、その外がわをあるいているような気がした。なぜ、そうなるのか、よくは分らないのだが、香椎とふたりだけで、夜の銀座をあるく、ということのなかに、なにか非現実的な色合いがあつて、それはたぶんそのせいなのだろう、と山木はおもった。どこか、見知らぬまちを、のんびりあるいてでもいるような、妙な違和感が、山木をつつんでいた。

いま、自分と香椎とをつなぎとめている人間関係にたいして、自分は、すこしも責任を感じる必要はないのだ、という気持が、どういうわけか、山木のなかには、あった。

いまのこの時間は、自分の人生のいわばプログラムの外がわにある、という感じなのだ。このはみだした部分にたいして、おれは、責任を持つ必要はない。つまり、おれは、全く自由^ににふるまつてかまわないのだ。そうかれは、自分に言つてきかせてみるのだつた。そして、この自由^のの感じに、どこかに、脱落感、もしくは喪失感がつきまとつていようであつた。それは、自分が、いま、

日常的な現実から疎外されている、という感覚に似ていた。

山木は、香椎とやらんで、夜の銀座をあるきながら、いまおれが、行動をともしているこの香椎は、いままで、おれが知っている香椎とはべつの人間なのだ、という気がする。いままで、山木と香椎とのあいだに張りわたされていた関係が、さつき会場で、香椎に声をかけられた瞬間、たちきれて、同時に全くべつのあたらしい関係が、うまれたのだ。

日常的な人間関係が、ある瞬間に、ふいにその意味やかたちを、改變してしまう、ということとは、じゅうぶん、ありうるだろう。しかもそういう変化は、きわめて陰微に、いわば足音をしのばせてやってくる。うっかりしていると、その変化に、気づかずに、やりすごしてしまいかねないほどのだ。

山木は、そんなふうなことを、ぼんやり、考えながら、あるいていた。そういうものおもしろい、どれだけの意味があるかは、疑問だが、山木は、ときとして自分にやってくる、そういう一種の放心状態が、気に入っていた。そういうときにだけ、かれは、自分が、人生を内面的に生きたような気になれるのだ。

ボトルには、まだ、寺田はすがたを見せていなかった。香椎と山木はスタンドに腰をおろして、寺田があらわれるのを待つことにした。

香椎は、寺田のほうでも山木に会いたがっていた、と言った。だが、山木のほうでは、べつに寺田と会いたい、とはおもわなかった。寺田は、演劇研究会にいたころ、よく「ジャン」という大学

の近くの喫茶店にかよっていた。そこは、劇研のたまりのようになっていた。その喫茶店に、安子というウェイトレスがいた。山木の妻はその安子なのである。昔の妻を知っている寺田と顔をあわせることは、なんとなく、うとましい気がした。けれども、会いたくない、というのではなかった。山木の気持は、寺田があらわれるのを待つあいだ、微妙なゆれかたをしていた。

妻の安子は、あす、静岡の実家へ帰るはずであった。妊娠したからである。腹に指さきをあてると、かすかにうごめくもののけはいが、あった。安子は山木の指を自分の腹に持つて行かせた。その感覚には、ひどくぶきみなものがあつた。彼女はとつぜん、あッ、うごく、うごくなどと、さけびだすこともあつた。妻が、だんだん、動物に似ていくような気がした。

「ぼくの娘も、新劇氣ちがいでね」

と、香椎は、言った。その言い方で、香椎が、そういう娘をじまんにしているらしいことが、想像できた。山木は、そういうことをはじめて聞かされた。おなじ職場にいても、山木と香椎は、いままで全くそういう私生活について語りあつたことはなかった。山木は、香椎に娘がいることも、また、その娘が、芝居好きだということも、いままで知らなかった。

娘のはなしを、うれしそうにする香椎に、山木は、なにかやりきれないものを感じた。おれはこんなふうな、娘のことを、自分より若い男に話したりは、したくないな、と、山木は、おもった。

香椎は、娘は、いまある劇団の研究生になっている、と言った。

「ちかごろの娘は」と、香椎は言った。「なかなか、割りきっているね。親のふところぐあいを知っているから、めいわくをかけたくないと言うんだ。それでアルバイトをしている。もっとも、あまり感心したアルバイトじゃないかもしれないがね」

「どういうアルバイトなんです？」

「小さなバアで、はたらいっているんだ」

香椎は、べつに抵抗を感じているふうでもなく、そう言った。

もちろん、これも山木にとっては、初耳であった。

「そうだ」と、香椎は言った。「もし、よかったら、きみも、ひいきにしてやってくれたまえ。神田のヴェロナという店にいる」

山木は、それにあいしてあいまいに答えたにすぎなかった。

べつに、積極的にその酒場に、香椎の娘をたずねてみたい、という気にもならなかった。すくなくとも、そのときには、そうであった。

「お嬢さんは、おいくつです」

山木は、そんなことをきいてみた。

「二十二か、三だろ。二十二だな、たしか、そうだ。ひとり娘でね、母親は、娘がそういう仕事をしたがっていることに、反対なんだ。ぼくは、まあ、好きなようにさせといたらい、という方針なんだが——」

山木は、そのとき、あるいは香椎は、むしろすすんで、そういう娘をバック・アップしているのではないか、という気がした。

娘をあてにしているのかもしれない、とおもった。べつにはつきりした根拠があつて、山木は、そうおもったわけではないのだが——。

「きみは」と、香椎が言った。「だいぶまえ、『ドライ・ブーン』というアメリカの流行歌があつ

たのを知っているか」

「さあ、知りませんねえ。ぼくは、音楽に弱いんです」

山木は、ハイボールを飲みながら言った。香椎は、その曲を山木が知っているかもしれないことを、はじめから、すこしも期待していなかったようである。

「これは、どういう意味なのかねえ」と、香椎はことばをつづけた。「直訳すれば、かわいた骨とということだろう。ところが、ドライ・ボーンズと、骨が複数になると、これは、やせっぽち、という意味になるんだ」

山木は、あいづちを打った。

「ぼくは、どういうものか、このごろ、ふっと、このドライ・ボーンということばを、おもいだすんだ。べつに、なんというでもないんだけどね」

「そういえば、なんとなく、象徴的なものを感じさせますね。かわいた骨か——」

山木は、香椎は、もしかしたら、このことばから、自分の死を聯想しているのかもしれないな、とおもった。

すると、山木は、この五十五歳の男のやせた肩を、力いっぱいなぐりつけてやりたいようなせつなさをおぼえた。

停年で、それまでのつとめをやめた男が、三十になるかならないかの後輩を相手に、自分の娘のことをしゃべったり、ほとんど無意味とおもわれるような感傷的な言辞を弄したりしながら、小さな酒場のストウールに腰をおろして、ハイボールを、ゆっくり飲んでいる。

この男の内がわのかげり、とでもいったようなものを、山木は、ふとかいま見た気持になった。